

地方自治ここにあり 首長インタビュー

英語教育の充実。きらり光る村の魅力 村を守り、持続可能な村づくりへ



山口賢二村長

北山村 山口 賢二 村長

人口450人（9月末現在）、和歌山県でたった一つの村で全国唯一の飛び地の村・北山村。その村でことし7月に村長選挙が行われ、新しい村長に元村職員・村会議員の山口賢二さんが選ばれました。地方を取り巻く環境がきびしさを増すなか、どのような村づくりを推進するのか、山口新村長にお聞きしました。インタビューは当研究所の鈴木裕範理事です。

奥田村政を継承 政策推進室をスタート

鈴木：北山村では、1968年以來、じつに48年ぶりに投票で選ばれた村長ということになります。

奥田貢村長による4期16年にわたった、村政の評価から聞かせてください。

村長：奥田さんの仕事としては、まず奥瀬道路の完成・開通があります。奥田

さんの目的やったんやが、これは大成功やった。それと、やっぱり教育関係です。今ではもう時代遅れやけど

も村プロ（自治体運営のブログ）の開設、じゃばらは産業として伸びてきた、本

当にいろいろとよく取り組んでくれたと思います。

鈴木：そうしたなかで、山口村長はどのように村政を担当していかれますか。

村長：これはの、とにかく村を守る。村を守るってこと。村を築いたのは、村の人なんですわね。今日あるのはそういう方々のお陰なんで、先人が築いてきた村を守っていききたい。

鈴木：村民の命と暮らしを守ることですね。

村長：そうやね、課題はたくさんある。村の雰囲気もかなり変わってしてきた。

鈴木：どういふふうに変わ



下尾井地区の集落景観

りましたか。

村長：やっぱりこれは恐らく人口の減少、人材がないと、ええ面での摩擦っていうのはなくなってくるんやね。それで、人口は、なるべく緩やかな減少でいって

くれたらいいと、当然お年寄りには自然減少になるんで、これは致し方ないとして、あとはどうやって補充するかが、これからの取り組みなんやの。

鈴木：日本創生会議が一昨年出した人口予測では、北山村は、消滅の可能性が大変高い村の1つに挙げられていました。

村長：あれは、あんまり気にしてない、中身を見ると要は、うちがうちなりに対策を取っていく、人材確保して、やって行かざるを得

目次

地方自治ここにあり 首長インタビュー 英語教育の充実。きらり光る村の魅力 村を守り、持続可能な村づくりへ 北山村 山口 賢二村長……	1
高野山麓地域・もうひとつの田園回帰 かつらぎ町天野から食を発信する移住者たち ……………	5

わかやま住民と自治

発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市湊通丁南1丁目1-3 名城ビル3F
TEL・FAX 073-425-6459
jichiken@crux.ocn.ne.jp 2016年10月号



英語を学ぶ小学生。先生は外国人

んやないかと思うんですわ。
鈴木：日本創生会議のレポートは、北山村の最近の状況が必ずしも把握されていません。この5年ほどのUターン、Uターンを見ると、毎年ふた桁の数字です。昨年、村内で生まれた赤ちゃんは6人。そこには創生会議のレポートでは見えない、この小さな村の実相があると感じます。

てないんやけどね。そこで、今度政策推進室をつくりました。
鈴木：政策推進室ですか。
村長：課題をまとめて掘り下げて、どうしたらええか、検討する部署です。極端に言うと、今度、職員採用するんですけどね、地元にはゆかりのある職員を採りたい。おじいさんなりが、まだ住んでおれば、お孫さんの、村に対する愛着が強いんではないかと。ですから、職員採用もそういう方向で行きたい。じゃばら関係も、もう1回見直して、何とか仕事につながるように持っていけんかと。子どもさんが6人か7人増えたのは、大体ほとんどがそう、奥さんの田舎とか、そういう感じでこつちへ帰って来てくれますんでね。
鈴木：若い世代が農山村をめざす、田園回帰が言われています。Uターンを増やすのは、大きな課題です。
村長：そうそう。職員は平成11年に採用してから10年採用せなんだんで、若い中間が、抜けてしもうた。
鈴木：定住が課題です。

村長：定住促進はの、従来どおりやっていきます。洗い直すところは洗い直す、たとえば、緑の雇用、いろいろの制度使って入ってきて、仕事がなくなつたと、でもそのあと村でそんなに手当てすることできんさかね、そうなるをやっぱり行政との間に不信感が出てくる。移住者の仕事づくり、雇用対策が重要ですね。

「英語教育の村」を発展 村政の柱に教育

鈴木：人口減で少ない子どもを、どう育てますか。
村長：教育は、やっぱり大事。奥田さんは英語教育に注目したけど、同感です、少ない児童生徒の中では、ややもすると、僕自身もそうやったけど、中学校出て、新宮、高校へ行つて、やっぱり圧倒される。そういうのを、少しでも和らげるために、何か1つ、特技があるといい。ほんで、外国人講師を雇って、その成果は非常にあった。しかし、もうちょっとやり方あるんやないかと。語学体験でき



ホームスティで異文化交流

る場所に、今2年に1回か、海外旅行に行つてる、そういう外国見るのもいいけど、それ以外に、また場所がつかれるんじゃないかと、これは継続して、やっていきたいと思えます。その成果は絶対出とる。やっぱり、高校へ行つても、絶対、これは負けることはないし、スニングはずばらしい。
鈴木：英語は小学校低学年から必修へ向かっています。北山村は、先行していたことになります。
村長：英語教育を、村の教育のPRに使えないかと思つてる。この学校へ行か行かそかっていうてくれたらええと思うんで、来年、試験的に、語学合宿つていうんかな、夏休み、利用して2泊3日ぐらいで、村内の子どもだけではないに、むしろ外から来ていただいて、村の良さをPRして、ちよつとでも、子どもを増やす方法に結び付けなきやなど考えてます。
鈴木：島根県の海士町は、過疎の島ですが、その島の教育が魅力で多くの子どもたちが留学しています。
村長：やつてみる価値はあると思う。
鈴木：語学教育、教育は、大きな柱の1つになると考えてよろしいですか。
村長：教育を受ける機会均等つていうのはね、あれはうちの村に当てはまらないや。なぜかしたらやっぱり、



じゃばら園 竹原地区で

鈴木：うちの村は、柱は筏とじゃばらなんで、誰がやっても状況は一緒、あとは

鈴木：住民が、村で暮らしていくためには産業の振興が必須です。林業の長期の低迷が続く中、奥田村政も推進してきた、観光と、じゃばらを活用した産業の追求になりますか。

産業の柱は じゃばらと観光筏 持続可能な体制の確立を

鈴木：保母さんたちのね。
村長：そうそうそう。やっぱり、中身のある村づくり、ぜひやってみます。

制度のもとでは、当てはまらん部分があるんですね、これはやっぱり村独自で何とか、考えていきたい。なるべく、ぎりぎりまで働けるように保育園終わっても、延長保育かな。働くお母さんっていうのは食事つくったりするんで6時頃まで何とかならんかって話があるんですよ。それは一応、やるように今、指示も全部出してる、ただ現場の理解が要るんで。



北山川の観光筏下り

どう生かしていくかなんで、今のままでええんかどうか、見直していくかだと思う。
じゃばらも、ちよつと不安材料がある。花粉症効果で名前が売れて、ぼーんと売上げ伸びたんやけども、これから、そういう医薬品が、出てくる可能性が大やの。どの製薬会社もやっぱり、世界的に研究してる、それを、ある程度予測した中で、開発関係をどう持つて行くか、それはちゃんと検討委員会なりつくって検討したい。施設も昔のまんまでやってきとるんで、連携性、一貫性がない、1つ、ちゃんとした施設を、できれば任期中の間での、まあ将来のためにつくっておきたい。その中である程度、就労確保につながればいい

鈴木：全国に例がない筏観

観光筏下りを 和歌山県の 自然文化遺産に

らつていう思いはあるんです。ラフティングも、人気があります。

鈴木：なるほど。筏とそれから温泉を軸にした北山の奥熊野観光ですが。
村長：うん、これはの、採算性が非常に悪い。経費がかかりすぎる。ただ、これ、うちの観光の目玉なんで、これだけはやっぱりまあ、多少縮小してでもやっぱり、してかんならんやろっていう思いはあるんです。

し、それと合わせてやっぱり行政で、抱えとった方がええんか、考えていかなあかんやろうと。
鈴木：それは、民間による経営ということに？
村長：民営化は奥田さんも声出してた、一応そういう方向性は打ち出してあったんでな。ただこれまあ非常に難しい問題なんで、やっぱり民間に力がないとの、どうしてもちよつと限度、限界がある。



村長：そうそうそう。

鈴木：文化は、経済的な価値評価だけでは計れません。筏は村の歴史文化遺産であり、県の文化遺産です。

鈴木：なるほど。
村長：筏の技術は、とにかく受け継いでいくっていうことが大事なんでね。

鈴木：僕自身は昔からの、この筏流しそのものが、もう文化やと思ってるから。ほんでこの筏師さんの技術っていうのは、本当はまあ言うたら、県の、文化財に指定してもらっても構わんぐらいのものやと思ってる。そういう位置付けやから、採算ばかり考えてやるわけにいかん。

光です。村内の下尾井の筏センターで、筏下りは村の歴史遺産、文化遺産というポスターをみつけました。
村長：僕自身は昔からの、



北山川 大沼地区で

鈴木：歴史文化遺産という、こういうような運動を村から起こすようなお考えはありますか。
村長：あります、あります。
鈴木：具体的に検討はしますか。
村長：今のところは観光課の方で検討しとんですけどね。文化遺産か、自然遺産か、そういう位置付けに持っていきたい。

鈴木：北山川はジオパークの地域、ジオパークと筏を連動させ、文化遺産にと考えていけば、村の魅力になるのでは無いでしょうか。
村長：御存じのように、小松の峠から手前の辺りは、いろいろな遺産があるんだよね。それで筏もお客さん運ぶだけじゃなしに、ジオパークを見学させるようなことをやっぱり考えた方がええんではないかと。
鈴木：村の物語をどのようになくさんつくっていくのが大事だと思います。
村長：そうです。
鈴木：高齢化率が高い村民の安全安心、どう守りますか。

村長：要は南海地震の、地震対策です。うちは民家は、まず100パーセント、耐震できてない、木造で古い家が多い。ほんで、とりあえず家屋の倒壊的を絞る。家が倒壊して火事起きるんが、電気、ガスなんで、その対策と予算、今の感震ブレーカーと、ガスをストツプできる装置になってるかどうか、それをとにかく取りかかれと。救助活動は、消防団との間でこれも目的絞って、とにかく早く取り組みたいと思ってます。
鈴木：道は、良くなっています。

ますが、山の中の村が孤立する可能性は大きい。
村長：覚悟はしなくてはいけない。外からの救援対策は、この辺は手が回らんと思う。うかうかしたら、1か月ぐらいの備蓄しておかんと、いま食料の備蓄は1週間あるかないかなんで、その辺の対策しとかなんだら。高齢者が多いんで、高齢化率50パーセントやからの。
鈴木：課題は山積ですが、平成の市町村合併で、北山村が単独を選択して良かったとお考えですか。
村長：これはもう大正解。合併しとつたら本当にもう、人口はいま以上に減り、恐らく筏事業そのものも、この存続は難しかったやろ。単独は大正解。
鈴木：しかし、地方自治をめぐっては、道州制導入の議論があります。
村長：全く反対やの。合併と同様、道州制になると多分、それこそ合併以上に目を向けてくれんと思うの。道州制にしても合併にしてもやっぱり、これはまあ、経費削減やから、言うたら、

ほんで住民投票して結局、単独を選び、これはもう大正解だった。これからも絶対もう合併なしで。僕は県に行つても言うんや。
鈴木：道州制は、小さな自治体、町や村が大切にされない、そういう政策だということですか。
村長：そうやね。
鈴木：つまり誤った政策だと。
村長：そうそうそう。これは、うちに限らず、東牟婁郡の自治体はほとんどそう思てるわ。三重県の一部もそうやと思う。
鈴木：一億総活躍社会が語られています。その言葉はともかく、高齢者も含めて、オール北山で、やっていかないと、駄目だと考えるんですがどうでしょうか。
村長：当然。高齢者がの、とにかく元気でおつてくれと、もうそれしかない。若い人はもう、職員自身がの、職員の前に一村民だからね、とにかく積極的の、いろいろな行事に参加せえと。筏やつとる筏師も若いのが、13人ほどおるんですけども、なかなか仕事できるのがおらんや。役所へほしいような人材もある、何とか人材の活用をしたい。
鈴木：任期の4年間で、これは必ずやるということはいかがでしょうか。
村長：じゃばらやな、やっぱり。先を考え、かちつとしたもんにせんと。これから、誰が交代しようが、変更しなくてもええような形をつくりたい。
村長は、別に、職員上がりでもいいし、それができるような形にしといた方がええ。じゃないとね、人口が少ない、うちのような村は、とてもやないけど、やつてけん。職員を育てたい、育てます。
鈴木：ありがとうございます。



高齢者宅が目立つ 小松地区で